「日本番匠記系本」の系譜

正会員 渡 辺 勝 彦*
正会員 内 藤 昌**

序

建築書として最古の内容をもつ「日本番匠記」系本には、Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ類の類型がある。すなわち、Ⅰ類（静嘉堂文庫本・大谷本）、Ⅱ類（西本・『三代巻』・『番匠之秘伝集』・『日本番匠始』）、Ⅲ類（『番匠秘伝』・京大本）、Ⅳ類（『三代之巻物』・『大工番匠始事』・『番匠方語』・『番匠之記録』・『日本番匠経』）に分けることができる。その上、これら 13 点には共通の原本が考定され、Ⅰ類が「日本番匠記」原本と「雲上記」原本とによって編成されたものであること、Ⅱ類・Ⅲ類・Ⅳ類は「日本番匠記」原本から派生したことが明らかになっている¹⁾。

そこで本稿では、さらに各類各本の詳細な系譜を分析して、その歴史的特質を論じるための前提としたい。

1. 各類の系譜

(1) Ⅰ類

Ⅰ類に属する静嘉堂文庫本(㊸)・大谷本(㊹)は、「日本番匠記」と「雲上記」を合わせたものであるため、内容が木割より番匠の由来に重点を置いたものになっている。

まず、これらⅠ類本 2 本における記述の相互関係を検討して、両者の系譜を推察したい。両者の記述を比較すると、その記述内容、表現などはほぼ一致するが、静嘉堂文庫本の方が欠落・省略が少ない。すなわち、大谷本に欠落する箇所として次がある。

第 3 段、十万億七千万貫而鑄一幾、諸行無常不成就また、同じく大谷本における、字句の誤脱は、第 5 段の「曲尺割之事」などに下記のようにある。

3-18 作日	「昨」の誤
5-19 (肘) 木大三寸六分	() 内が脱
5-30 蔀柱寄高一寸三分、厚(八分)	〃
5-32 六分当合、加(小)大取	〃
6-2.4 鉄	

注. 各引用に付す数字は『番匠之秘伝集』(前稿所収)の当該段数一行数を示す。以下の引用も同じ。

さらに省略は第 1 段に見られ、例えば「巧匠三国流通伝書」で「不可思容易」としている箇所を「云々」と略し

ている点などである。したがって、大谷本より静嘉堂文庫本を正確なものとみることができる。

さて、Ⅰ類本 2 本はともに写本である。そのため、両者に共通する原本、Ⅰ類原本の存在が考えられる。この原本について次に考察したい。Ⅰ類本の記述内容は既に述べたように、「日本番匠記」原本の記述に忠実とみられる点で他類本を上廻っており¹⁾、遡ってⅠ類の原本も記載箇所については、「日本番匠記」原本の内容を最も正確に伝えたものであったとみられる。

Ⅰ類の文体は、各類で記載内容の相違が少ない第 3 段の例を静嘉堂文庫本から引くと、次のような漢文体である。

3-1 仏召大匠、宣精舎建立事可安

わずかに第 5 段「曲尺割之事」に「是家之數知、何六分外所有」と漢文体が崩れている箇所があるものの、全体として整った漢文体である。

以上のように、個々の項目について意味が明瞭であり、文体も整っている。したがって、Ⅰ類原本は他類の原本より早く成立した可能性が高い。この場合、Ⅰ類原本の成立時期は、他類の原本で最も早いのは『三代巻』の長享 3 年(1489)であるから、これを遡ると考えられる。

(2) Ⅱ類

Ⅱ類に属する西本(㊺)・『三代巻』(㊻)・『番匠之秘伝集』(㊼)・『日本番匠始』(㊽)の中で、西本は第 1 段のほか第 2 段・第 3 段を欠き、第 5 段・第 8 段に欠落がある。したがって、まず西本を除く 3 本の記述内容を比較し、その系譜を考察する。

㊻ 『三代巻』

他の 2 本にない特有な点を以下のように持つ。

1- 夫尋番匠本源者、(中略)、工夫一看、何異禅宗旨、(中略)、諸人能々著眼看焉

4- 吾朝聖德太子十七才、昭勝四戊申年三月七日、百済国威德王而番匠五十人渡給也。依之日域ニ弘大工一卷書、相承早

4-1 七堂ノ式ヲ盡ク此巻物ニ作給フ。藏シ跡ヲ衡岳ニ、化ヲ日域ニ垂シ、寔ニ至聖乎哉

4-2 屋敷圓門ニ式有之

5-14 同数ヘ是モ八分数ヘ。依間ニ八分数ニ作

5-15 大床ノ長、浜縁長。注云、即心形体也

* 名古屋工業大学 助教授・工博

** 名古屋工業大学 教授・工博

(昭和 59 年 4 月 13 日原稿受理日、討論期限昭和 60 年 5 月末日)

注. 傍点を付した例では傍点部が特有な部分。

第1段, 第4段, 4-1, 5-15 は付加されたものと認められる。5-14 の記載を欠くのは, II類の他の2本, 『番匠之秘伝集』と『日本番匠始』およびI類だけである。しかも『日本番匠始』では, 5-14 の箇所には記載がないが, 「唐様の作り七分数 (5-7)」との記述に引続いて「間に依て七分数を作り」と同様の表現が見える。したがって, 『三代巻』の5-14 の記載は当初からあったと考えた方がよい。

また, 『番匠之秘伝集』・『日本番匠始』に共通する表現と異なる点も, 以下に示すように多い。

3-9 諸行無常ノ無一錢、此鐘不成就(諸行無常の一錢なくば此鐘成就せしこと仏おぼしめし給へり) 5-1 日本堂ノ様(日本様の堂) 5-2 小二ハ無加、大ヲハ取(すくなきには加へ、大をばとり) 5-5 <記載なし>(註云、旦那の好随作、仁儀礼智信也、五常也) 5-7 三色ノ内ニ九ノ模様在(九様) 5-12 是上中下三色ノ内九色在(是も上中下中中下中下中下此三色の内に九の色あり) 5-14・16 祠(社) 5-17 屋数(屋敷) 5-20 桁太サ三寸二分(三分) 5-26 高倍(こいは) 5-28 鴨居厚(中略) サイノ厚四分高八分(高さは三分) 5-43 朝ニハ夙トニ起テ(朝にはとく驚て) 6-1 悪魔降伏シ天魔外道不来(天魔外道も知らず) 7-4 其中ニ僧堂ヲ立ツ(其中に僧堂にきす) 7-9 庫下ハ青竜地、凹用所ヲ。是ハ東シ下リ也(庫裡ハ青竜地也。中ひくの用所也) 7-14 抑々七堂ハ五体五輪形大小呼(七堂には五体五輪の形大小に呼て)

注 ()内は『日本番匠始』の表現。傍点が相違箇所。

5-1, 5-2, 5-28 は写本に際してか意味が不明確になっているが, 3-9, 5-7, 5-12, 5-43, 7-4, 7-9 は意味が明確で崩れていない。

以上に述べた, 他の2本との相違および項目の付加は, 他の2本との系の別を示している。文意が正確であり, 誤字の少ない点は, 『三代巻』原本の成立時期を『日本番匠始』『番匠之秘伝集』より遡らせ, 奥書の年号が『日本番匠始』のものより遡ることと符合する。なお, 文体は漢文体である。

㊤ 『番匠之秘伝集』

この本の中に記されている項目は, 以下のとおりで, 少ない。

3-12 葱領浪々千漢万川 5-42 雖然古人云、巧匠取斧、則頭々随規矩謂之、曠然繩墨外 5-44 挙手、動足、転々左右案之

特有な表現は下記のように多いが, これらは写本に際する, 字句の変更あるいは誤写と言えよう。

3-17 其子細 3-18 大工答曰 4-3 四箇儀式 4-4 謂正謂凶 5-3 天地一致心、一心之露現也 5-4 以端知奥 5-23 縁高三寸一尺八分 5-30 高二寸二分也 5-37 施則 5-39 三思一行九思一言 5-45 諸社令得惠 5-47 悪鬼来、作妖 5-60 板敷之高三寸五分可造、一長押可上 5-98 仏果菩提 6-2 拱手 6-6 自仏道唱 6-10 門許 7-12 出興之道理

注. 傍点を付す例は傍点部が該当箇所。

また, 欠落は以下のとおりである。

5-7 依間七分作 5-44 加様之振舞巧匠 5-46 円満也、善哉々々 5-77 厚八分 5-88 易、七分数易 7-13 六分は六分ニ不如 7-18 秘中云

注. 欠落部は『三代巻』による。

この本は, 以上のように特有な表現が混るものの, 項目としては特有な点が少ない。しかも「唐様 (5-7)」との表現は, 『日本番匠始』の「唐やう」との表記とともに他本の場合に比べ明確である点が注目される。すなわち, II類の他本, III類本, IV類本では「か様」「ケ様」「加様」のいずれかの表現をとっており, 崩れた表現になっているからである。また, 文体も掲出のような¹⁾漢文体である。13本中もっとも整った内容をもっている。

㊦ 『日本番匠始』

前記『番匠之秘伝集』とは共通点が多い。この本の中に記載されている項目は次の1例に過ぎず, 特有な項目がほとんどない。

5-44 日々座禅をして心をしづむべし

また, 特有の表現も以下のとおりで, 比較的少ない。これらのうち5-12, 5-31 は誤写とみられる。他はIV類と表現が共通する。

2-1 聖徳太子の守屋を退治給て 3-2 先口八町の鐘 4-2 人姿は地水火風空を以外相し 5-5 上の上の上、中の上、中の下の上、下上中、下下中、下中ニ下 5-12 諸々の上にてなる事をえたり 5-27 のき柱のこいは也 5-31 しとみの柱乃寄は高さ一寸八分

『日本番匠始』の文体は, 掲げるような和文体である。念のため他本との対照箇所を以下に示す。

3-1 天竺の祇園精舎をつくられる時大工をめて汝にてたづめ事ありと仏仰ければ, 大工承して謹てあり, 仏仰けるやうは祇園精舎を作る事はやすし

特有な表現においてIV類本との共通点が見られるのは, 『日本番匠始』が和文化する際, 和文体を主とするIV類の影響を受けたためと推察される²⁾。

以上により『三代巻』『番匠之秘伝集』『日本番匠始』の系譜は, 『番匠之秘伝集』と『日本番匠始』が同じ系統に属し, 『三代巻』が禅宗旨などの付加によりその傍系と考えることができる。なお, 『日本番匠始』の和文化は, IV類の影響からみて, IV類の和文体化の時期を遡らないことになる。

次に, 残った西本と以上3本との内容を比較し, 上記の系譜に位置づけたい。

㊧ 西本

第1段・第2段・第3段を全く欠くほか, 第5段の一部など次の項目も欠落している。

4-3 四神相応之地云。黄竜 5-3 此函蓋相応天地一致心、一心之露現也 5-18 家之間七間尺本也 5-19 柱太六七四十二分可造之 5-23~37 厚一寸二分, (中略), 自仏伝之

注. 引用は『番匠之秘伝集』による。

西本特有の項目は、次の3例に過ぎない。

- 5-36 材木にくてん有、よくよくあんしんしてきるべし
 6-7 柱のもとを打て、本座に帰るべし
 6-8 其後中をうつべし
 6-10 南無薬師留里光如来と十二度唱、一礼して本座に帰るべし

しかし、西本のみ内容が異なる項目は、次のように多い。

- 4-2 相とは心の外の相にあらず(相へ不有心、『三代巻』)
 4-2雲(空) 5-22 こまいのしたは一寸八分はらひ一寸にすべし(木舞之下端一寸八分、厚一寸二分) 6-5 雲(空)
 6-5 右の手にてうのを取なおして本座に帰る也(三足退、右手廻可帰) 6-17 ならまくさまんたはくらたかんと不動の呪を誦して七度唱(不動之慈救咒七返唱) 7-4 其返に僧堂有べし(其際僧堂帰) 7-6 西しやうは山門の右のわき(東司、山門右脇) 7-7 風呂山門の左わき(浴室、山門左脇) 7-8 くら僧堂にたひする也(庫裡、対僧堂)

注. 傍点を付す例は傍点部が該当箇所。()内は特記がない限り『番匠之秘伝集』。

4-2, 6-15の「雲」は誤写, 7-8も誤りであろう。7-6, 7-7は用語の相違で、「西浄」「風呂」を用いているのは13本中にこの本だけである。しかし、「西浄」は『徑山寺記』・『匠明』所収の人体表相図に、また「風呂」は仙台の棟梁朴沢直好(寛政11年没)著『無隠図』にそれぞれ見え²⁾、ともに用いられたようである。6-5・7は、儀式に関する記述が詳しいもので、単なる付加とは認められず、相違の理由が明らかでない。

以上のように他本との相違が目立つが、『三代巻』が『日本番匠始』・『番匠之秘伝集』と異なって用いる表現を、西本も下記の箇所で見ている。

- 4-2 屋敷のまるさ門に式有 5-1 日本の堂の作りやう
 5-2 小のなきにハ大をくわへとる 5-5 <記載なし>
 5-20 けたの大き三寸二分 5-43 朝にははやくおきて
 6-1 悪魔降魔天魔外道不来

これらのうち、5-2, 5-5, 5-43, 6-1は、13本のうちで西本と『三代巻』だけが同一表現をとっている。4-2, 5-20も、この2本とⅢ類の『番匠秘伝』のみがとる表現である。

したがって、『三代巻』と最も近く、同系とみられるが、相違も無視できないので、『三代巻』原本から派生したと考えたい。

なお、西本は次の理由から写本と考定できる。

- ① 「空」を「雲」と誤写(4-2, 6-15)している。
- ② 欠落項目があり、原本とは考えられない。特に第5段で柱間(5-18)・柱太さ(5-19)を欠きながら、肘木・桁などを以降に記載しているのは不自然である。

原本の破損等により、結果的に多くの欠落を生じるとともに和文化したのであろう。

以上、Ⅱ類本の相互関係を述べたが、ここで改めて各本の成立時期を検討する。『三代巻』には長享3年(1489)、『日本番匠始』には明応4年(1495)との年号が見られる。

『番匠之秘伝集』は、筆録者坂上備後守すなわち建仁寺流大工第2代の坂上吉政とすれば、相当遡ることになる。

したがって、Ⅱ類本は15世紀末には成立していたとみられる。西本は慶長12年(1607)の年号を持つから、西本原本はこれを遡ることになる。西本原本の成立時期は、西本に多くの欠落があり、書体・表現にも相当崩れがあるから、ある程度遡って考えた方がよく、16世紀後半とみたい。

(3) Ⅲ類

Ⅲ類とⅣ類との関連が強いことは前稿で述べたが、その系譜上の関連をはじめに検討する。

Ⅲ類は欠落が第3段にあり、独特の字句・内容を持つ。しかし、既に述べたように¹⁾独自の表現は少なく、Ⅳ類に比べ内容が正確である。一方、Ⅳ類には文章の欠落、用語の崩れた表現がみられる。したがって、Ⅲ類を主流、Ⅳ類を傍流ととらえることができる。

Ⅲ類の『番匠秘伝』(⑩)と京大本(㊦)との関係について記載内容から検討する。記載内容は概ね一致するが、相違を挙げると次のようになる。まず、『番匠秘伝』が有し、京大本に見えない点としては以下がある。

- 4-2 屋敷ニ圓門式アリ(屋敷ニ式アリ) 4-4 此屋敷ニ一七堂ノ作り様有り(凡ソ屋敷) 5-1 寸ノ長ヲ用テ尺ヲ定メ、尺ヲ用テ大ヲ定メ 5-20 長ヲバ四寸二分ニ作テ大成ニハ引ト四寸ニ可作 6-5 南北ト唱テ後(南北ト唱テ) 6-6 南無阿伽陀阿羅迦二仏ト唱テ不動ノ慈救咒七返唱ス、異本ニ曰、南無釈迦多宝二仏ト唱テ毘沙門ノ咒七返唱テ(南無釈迦多宝二仏ト唱テ毘沙門之呪ヲ七返唱テ)

注. 傍点を付す例は傍点部が該当箇所。()内は京大本。一方、京大本に記載されているが、『番匠秘伝』に見えない点は、次のとおりである。

- 5-17 大床ノタケハ、イマエンノタケ、如此致 5-28 鴨居ノ厚サハ三寸カ本也 5-32 天井ノ千ノ大サハ一寸六分 また、『番匠秘伝』・京大本で表現が相違する点としては以下がある。
- 5-5 仁義礼智信ノ五常有(仁義礼智信ノ五情) 5-12 即々曹々(ソク々々早々) 5-20 桁ノ大サ三寸二分(けたノ大サハ三寸三分) 5-38 餓鬼ニモ不落(施ニモウテス)

注. 傍点を付す例は傍点部が該当箇所。()内は京大本。

これらの相違を検討すると、その多く(4-2, 4-4, 5-12, 5-20, 5-96, 6-5, 6-6)は『番匠秘伝』の記載がⅡ類本のものと一致する箇所である。このほかは『番匠秘伝』の付加(5-1, 6-6)および写し落し(5-15, 5-28, 5-32)、京大本の誤写(5-5, 5-20)とそれぞれみられるものに過ぎない。したがって、『番匠秘伝』はⅡ類の影響を受けたとみられる。逆に京大本は写し落し(5-15, 5-28, 5-32)がない。京大本に見えない点のうち5-20は、Ⅳ類に記載が見られず共通する。

Ⅲ類2本の文体は、ともに片仮名交りの漢文体(訓読文)で、一部訓読されていない部分を残している。その

表一Ⅰ IV類本各本の記述

段・行	『三代之巻物』の記述例	判定	三代之巻物					他の記述例		判定
			大工番匠始事	番匠之記録	日本番匠之記録	特記ない場合×印の表現例。				
2-1	太子守屋 [○] 追討給		○	△	○	○	○	○ ¹ 退治 △追罪	付加	
2-1	後我朝ニ仏法を弘め給		○	○	○	○	○	○ ¹ 其後		
2-2	番匠ノ式		○	○	×	×	○	○番匠式尺		
2-2	悉羅し給ふ		○	○	○	—	—			
3-2	鉋輪汝如何可釣		○	○	○	×	×	汝云何 [○] 番匠 [○] べき		
3-5			—	○	○	○	×	両心 [○] あり○両心共在		
3-6	鉋の機繰返し給		○	×	○	×	×	機繰仰		
3-9			—	—	△	△	△	其外諸機繰等此節をすすめ		
3-11	端一人		脱字	×	×	○	○	○せめ一人にさす		
3-14	大工仏白書			○	○	×	×	大工白		
3-14	正理有空			○	○	○	×	止理空性にあり○ ¹ 正理在空性		
3-14	仏君汝有同色 [○] 云々			○	○	○	△	△同色に有		
3-16	吾云寸ハ長し尺短し			○	○	△	×	吾てのたまはく△寸はながく尺はみじかし		
4-2			—	○	—	○	○ ¹ 地水火風空に度量、心自心、相非心			
4-3	屏敷に式あり		○	○	○	×	屏敷あり			
4-4	端正吉イ四イ日		△	△	×	—	けんみなことごとくしきにより吉といふ玉といふ			
5-1	九分をあてかい計て	崩れ	△	×	△	△	錠計 △九分計	脱落		
5-1	大きさをだめ		○	×	△	△	△	天定△大を納せば△大に定め△ ¹ 大小定む	誤写	
5-1	間さも定		○	○	×	○	△	きをさだめ △ ¹ 広さを	誤写	
5-2	下きを定		×	×	△	×	×	× ¹ 宮定△高さをさため、ひくきをさたむ	誤字	
5-7	三色ノ内九 [○] 機繰有		○	○	○	×	×	三色の内九の [○] うら [○] しや [○] あり	崩れ	
5-9	こうばい		○	×	△	×	×	并 [×] 木舞△こうばへ	崩れ	
5-11	然間クワン形のソリニ依て		○	—	○	×	×	然間懸魚欄	崩れ	
5-11	角木 [○] ヲスツを作る		○	×	○	×	○	角木 [○] 易作	誤字	
5-12	ソクタツツタツタ		○	○	○	—	—			
5-12	機繰ヲ心ニ得れば物々ノ上ニ成事を得たり		○	○	×	×	×	もやうにさえつければ、ものを上になすことを得たり× ¹ もやう心得により、ものの上なることを得る	崩れ	
5-14	寸々尺となして		○	△	×	○	—	寸に尺をなして△寸々成	崩れ	
5-14	社		○	×	—	×	×	祠	誤字	
5-15	大床ノ高ハ		脱落	×	×	△	—	× ¹ 大床ノ長サハマエシノハ長ハマエシノハ長△大床のたけハ縁だけ	誤写	
5-16	実者ノ神は階七重ニタム		○	×	○	△	階七重△実は神階七にたたむ	欠落		
5-16	社によりて半分計		○	○	×	×	吾輩によりてはんぶんはからひ× ¹ 同半分ニより計	崩れ		
5-20	桁ノ大き作三寸六分		△	×	—	△	長ノ大サ三寸三分ニ作ル△桁大三寸三分作	誤字		
5-24	下ナゲシは柱ニト面ヲ落ス		○	×	○	△	掌長柱ノ下ニ面ニ落ス△下長柱柱下面落	誤写		
5-26	壁ノ高サは長押ノ下タバカラ桁ノ上一尺八寸ニス		△	×	×	×	壁の高サハ長押のはな× ¹ 小壁高長押下端納長に端× ¹ 木壁高掌長押下葉棟上ケタ葉	崩れ		
5-27	軒柱ノコイハ也	崩れ	△	×	—	△	軒ノ柱前同△軒柱格也× ¹ 軒ノ柱垂木也	崩れ		
5-32	何か六分ノハツレタル処あるや		○	×	×	×	いつれも六分にはずしする所有× ¹ 何レカ六分ニ適所ハ有ル	崩れ		
5-35	鍛錬シテ知り得レバ		○	△	○	×	鍛錬心得れば△鍛錬、可 [○] 知心得ツレバ	脱字		
5-42	タニハ端で面壁向工夫成		○	△	×	×	端で面壁に成す工夫さく× ¹ ゆふへにかへりて面壁おなし△タニハ向壁ニ成工夫			
5-43	晩カスミに驚、其日ノ三昧案し	誤字	×	×	×	×	速に驚、其日の三昧やすくて× ¹ あかつきにはすみやかにとおろき、その日のさんしあむへし	崩れ		
5-47	尺ノ内を番匠として計べし		○	×	○	△	尺事番匠ハ可 [○] 計△尺の中を番匠	誤字		
7-2	脇間短三間三引 [○]		○	△	×	×	脇間の間を短三間に△脇間短三間三引 [○]	脱字		
7-7	浴室山門之ととと [△]	誤字	△	×	△	○	浴室三門○浴室は山門の左脇△よくしつはきんもあひたりのわき	脱落		
7-8			—	○	×	○	仏殿ハ吉庵の地な [○] ひきの [○] 処をもちうるなり○ ¹ 仏殿ハ吉庵上地凸用ル [○] 処也	誤字		
7-9	庫下は背庵也、中ノ用処也	誤字	×	○	×	○	○ ¹ 庫下ハ背庵地凸用 [○] 也			
7-11	五間ノ仏殿之時ハ五寸八	誤字	△	—	○	—	○ ¹ 五間之仏殿の時ハ五尺八寸			
7-12	西門ノ四角ハ		○	×	○	—	両前四隅ハ	誤字		
7-13	大間也		○	—	○	—				
段・行は『番匠之秘伝集』に付したものによる。			○	31	18	22	13	9	傍点を付す例は、傍点の箇所のみ相違する。	
			×	5	14	12	20	21		

○意味が明確な記述例
△意味がやや不明な記述例
×意味が不明な記述例
—記述なし

判定はⅠ項本・Ⅱ項本の例を対照して行なった。

文体を示すと、次のようである。

3-1 天竺祇園精舎建立シ給ケル時、仏大工ヲ召テ宣フ様ハ汝如何メカ精舎ヲ可立

次にⅢ類本の成立時期を述べると、『番匠秘伝』は奥書に従えば天正4年(1576)の筆録によるが、第8段のはじめに記載された年号から永正5年(1508)には原本が存在していたと考えられる。

京大本は奥書によれば、寛永19年(1642)の写本であるが、原本は永正10年(1513)には成立している。したがって、16世紀初頭には両本が成立していたことになる。

(4) IV類

IV類5本の比較のため、各本の記述を対照して2本以上に異動がある場合を表-1に掲げる。以下、各本について述べる。

①『三代之巻物』

この本には、他のIV類本とは文章・語句の有無で相違する点が多い。まず、特有な文章・語句を挙げると、次のようになる。

3-3 大工答云、何ノ子細カ可有申、仏重問云、何としてか釣べき 3-6 長者子細なく 3-8 羅睺羅¹に不及 6-7 真言云、曇莫三曼駄縛日羅殺戰陀摩訶路灑拏羅頗吒耶呬恒羅他吒轄 6-10 真言云、俺戸嚙々々旃荼利摩登耆婆婆訶

注。傍点を付す例は傍点部が該当箇所。

また、他本と相違する表現は、3点(5-14・16, 5-26, 7-11, 以上表一1参照)である。この本にだけ欠落する文章・語句も次のようにある。

3-4 如何可有不審乎 3-5 両心共在 5-49 不犯 7-8 仏殿、黄龍王地凸用処也

注。【大工番匠始事】による。

以上の特有な点には、Ⅱ類と共通するものが4例(3-3, 3-6, 3-8, 5-49)あり、その影響を受けたと考えられる。このほか、6-7, 6-10は12本中この本のみが有する記述で、後補とみられるが、追加はこの2例、欠落は3例(3-4, 3-5, 7-8)と少ない。また、各本に異同のある箇所をみても(表一

1 参照), 文意が不明確な点などが少なく, 他本より正確である。

したがって, この本の筆録年代は他のⅣ類本より遡るとみられる。しかし, Ⅱ類本の影響を受けたと考えられる点の特異であり, 傍系に位置づけられる。

文体は, 以下のような漢文体(訓読文)が部分的に見られるが, 全体として上記の例のような和文体である。

3-1 天竺祇園精舎被造時, 召仏大工被仰様ハ作精舎ヲ事ハ易シ

Ⅳ類本の和文体は, 他のⅣ類本に先行してこの本に既にみられることとなる。

㊤ 『大工番匠始事』

内容構成上は, 既に述べたように¹⁾『番匠方語』とともにⅣ類本のうちでは, 欠落・付加がほとんどないものの, 細部文章, 語句には以下のような欠落が目立つ。

まず, 文章の欠落は次の5箇所に見られる。

5-11 然間クワン形のソリニ依て 5-35 能々鍛錬して見レバ六分は六分ニして通る, 七分は七分ニして通る 5-38 人間にては得福祐 5-39 三思一行ト者三度案じ善事を定め, 亦九思一行は 7-7 浴室山門之右ノ脇

注.『三代之巻物』の表現による。傍点を付す例は傍点部が該当箇所。

以上は, 5-38 と7-7 がⅠ類本にも見られないのを除いて, 他類本にも記載されている部分で, この本の特徴となる。このほか, 字句の省略(3-6, 3-11, 5-16)あるいは重複(5-15)があり, さらに誤字などにより文意が不明確になっている箇所(5-1, 5-1, 5-2, 5-9, 5-11, 5-14, 5-20, 5-24, 5-26, 5-27, 5-32, 5-43, 5-47, 7-12)がある(表—1 参照)。これらのうち5例(5-1, 5-1, 5-20, 5-24, 7-12)はこの本特有の誤字である。

こうした記述内容をさらに『三代之巻物』と比較すると, 欠落が多く, 正確さに欠ける点が指摘できる。したがって, 『大工番匠始事』は『三代之巻物』より降るものと判定されよう。しかし, 付加がほとんどなく, 他類本の影響がみられないから, Ⅳ類本の直系にあるものとすることができる。

㊦ 『番匠方語』

他本にありながら, この本に欠落している文章・語句は, 次のとおりである。

3-15 又大工白 5-14 又祠数は八分 5-20 (析)大サ三寸三分ニ作ル, 高三寸八分ニ作ルヘシ 5-22 又貫木厚ハ一寸八分, 高ハ三寸五分ニ作ヘシ, 縁高ハ一尺八寸 5-26 是ハ軒ノ柱前同 5-29 高サ三分, 上サイノ高サ八分, 厚ハ四分 5-30 追戸柱寄ハ一寸三分, 厚八分 5-34 九分数易, 七分数易シ難シ, 不ス易々シ不難 5-35 (七分は七分ニして通る) 7-4 法堂ト仏殿トノ間三間也

注.『大工番匠始事』の表現による。()内は『三代之巻物』による。傍点を付す例は, 傍点部が該当部分。

一方, この本のみ存在する記述も下記のようにある。

5-7 間ニよりて七分ニ作

これは, 他のⅣ類本には欠くが, Ⅱ類本・Ⅲ類本には見られる記載である。他本と異なる字句・表現は, 下記のように見られる。

2-2 仏法ひろめ給ひし時より社 4-2 人の体は 5-14 寸に尺をなして<表—1 参照> 5-29 障子の柱よせあつき八分, 高一寸三分<他本では「七分」と「二分」> 7-8 仏殿ハ黄竜の地, なかひきの処をもちうるなり<表—1 参照>

以上が特有点で, 欠落は多いが, Ⅳ類本として他本との相違が比較的少ない。特有点にはⅡ類あるいはⅢ類と表現が共通するもの(3-15, 5-7)があり, その影響が感じられる。

各本で異同のある部分については, 『大工番匠始事』より不明確な点がわずかに多い(表—1 参照)。しかし, 上記の欠落は『大工番匠始事』より多く, 総合すれば同程度の正確さと言える。したがって, 『大工番匠始事』とはほぼ同じ頃と記載内容から判定されるが, 奥書が『大工番匠始事』万治2年(1659)に対し『番匠方語』寛文9年(1669)と後の年代を有するから, この分だけ降ることになる。

この本に特有点でⅡ類本・Ⅲ類本との関連が見られたが, 異同がある部分についても関連, 特にⅡ類本と共通の表現を持つ『三代之巻物』との関連を検討しておきたい。『三代之巻物』とのみ共通する表現は, 次のとおり多い(表—1 参照)。

3-6 鐘様 3-14 正理有空 4-2 <欠> 5-9 こうばへ 5-11 ぐわんきやうのそりによりてすミ木にやすめをつくる 5-24 下長押ハ柱に一めんをとす 5-35 たんれんしてしりえずれば 7-9 こがしたは青竜地, なかの処をもちゆるなり 7-11 五間の仏殿の時は五尺八寸

注.Ⅱ類本と同じ表現は, 3-6, 3-14, 5-9, 5-11, 5-24, 5-35, 7-11。

したがって, 『三代之巻物』と同じ系譜が考えられる。また, 他の3本のそれぞれとのみ共通する表現は見られず, 共通性が比較的希薄である。『番匠方語』は, 記述の正確さにおいて『三代之巻物』より劣るから, 『三代之巻物』より降ることになる。

なお, この本は版行されたが, その文体は次のような和文体である。

3-1 天竺の祇園精舎をつくれける時, 仏大工を召して仰けるやうハ, 精舎の事ハやすし

㊧ 『番匠之記録』 ㊨ 『日本番匠経』

この2本は共通点が多いので, まとめて扱う。まず, 『番匠之記録』に特有点は以下の2点に過ぎない。

5-27 枅 5-47 尺の中を番匠して

5-27 は「枅(ひさし)」との用字が特殊であり, 5-123 は「番匠して計るへし」となるべきで, 欠落がある。

『日本番匠経』に特有点は次の6点で, そのほとんど(3-16, 5-14, 5-16, 5-24, 7-9, 7-13)が文章の欠落である(表—1 参照)。

3-16 答てのたまはく 5-14 <欠> 5-16 実は神階
七にたたむ 5-24 <欠> 7-9 <欠> 7-13<欠>

文意が明確でない点は両者ともほぼ同程度で、前掲3本に比べて多い(表—1参照)。したがって、この2本は年代が前掲3本より降るとみられる。

『番匠之記録』と『日本番匠経』について、各本との関連を求めると、まず両者の共通点が36例と最多で、うち23例はこの2本が共通して他の3本と異なっている(表—1参照)。したがって、この2本は同じ系譜とみられる。

この2本と他の3本との関係は、残り13例のうち、『大工番匠始事』に一致し、『三代之巻物』および『番匠方語』とは異なるものが6例(3-6, 4-2, 5-9, 5-14・16, 7-8, 7-11)を占める。『三代之巻物』および『番匠方語』に一致する例はなく、『番匠方語』のみに一致するもの4例(2-1, 3-9, 3-11, 3-14)、『三代之巻物』に一致するもの

の1例(5-1)である。したがって、『番匠之記録』と『日本番匠経』は『大工番匠始事』の系譜に属すると考えられる。『番匠方語』との関連は、この2本が『番匠方語』の影響を受けたものと文章の明確さの度合から判断される。

さらに『番匠之記録』と『日本番匠経』との関係は、『番匠之記録』の方が意味の明確な点が多(表—1参照)、既に述べたように文章の欠落も少ないから、『番匠之記録』が『日本番匠経』に先行するとみなすことができる。

なお、『番匠之記録』の文体は、掲げるような和文体である。

3-1 天竺祇園精舎造られ給ひける時、仏大工を召て仰けるやうは、精舎造る事やすし

『日本番匠経』も同様の和文体である。

次にⅣ類本の成立時期は、『大工番匠始事』は万治2

図一 「日本番匠記系本」の系譜

年の写本、『番匠方語』は寛文9年の版本である。『三代之巻物』がこれらに先行するが、既に和文体となっており、以上の記述内容の検討においても大幅に遡る要素は見られない。したがって、Ⅳ類本は17世紀後半に成立したと推察される。以上Ⅳ類本は、『大工番匠始事』を除いて和文体で書かれており、和文体化の傾向が顕著である。

結

掲出の13本は、以上の検討結果および既に述べた各々の系譜¹⁾から、図—1に示す系譜を形成すると考えられる。各々の系譜および特徴は、以下のとおりである。

Ⅰ類は整った漢文体で、記載箇所については原本の内容を最も正確に伝えている。したがって、Ⅰ類原本は他類に先じて成立したとみられる。2本のうちでは静嘉堂文庫本がより正確で正系、大谷本は傍系となる。

Ⅱ類は「日本番匠記系本」の内容を正統に受け継いでいる。15世紀末には成立していたとみられ、内容は正確で欠落が少ない。Ⅱ類本4本のうちでは『番匠之秘伝集』が特有な表現が少なく、正系と考えられる。『日本番匠始』は『番匠之秘伝集』同様、特有な表現が少ないが、和文体化にⅣ類の影響が認められる。『三代之巻』は最も遡る年号を有するが、禅宗旨などの付加があり、傍系となる。西本は『三代巻』とのみ共通する表現を有し、『三代巻』から派生したとみられる。

Ⅲ類は16世紀初頭に成立したとみられる。内容は番匠の由来に関する部分に省略があるが、Ⅳ類より明確である。京大本が正系で、『番匠秘伝』はⅡ類の影響を受けており、傍系となる。

Ⅳ類は17世紀後半に成立し、和文文化が進んで各地に

普及したものである。欠落が多く、意味が不明確になっているため木割書としての性格は薄れているが、反面、太子講の祭具としての性格が強まっている。Ⅳ類各本のうちでは『三代之巻物』が最も内容が明確で、『大工番匠始事』より遡るとみられるが、Ⅱ類の影響を受けており傍系となる。『番匠方語』は『三代之巻物』と共通点を持ち、その派生となる。『大工番匠始事』は欠落はあるが付加がほとんどなく、Ⅳ類の正系となる。『番匠之記録』『日本番匠経』は文意の不明確さがさらに進んでおり、系譜としては『大工番匠始事』の系統に属し、『番匠方語』の影響を受けている。この2本では『番匠之記録』の方が先行する。

以上のように、15世紀にはすでに成立していたと考えられる「日本番匠記系本」は、その系譜が江戸時代末期まで続いている。しかも、その分布範囲も広範囲にわたっており、その社会的背景は中世・近世建築史上、重要な意義をもつものと思われるが、それについては改めて論じたい。

なお、本研究にあたっては山中保博氏の協力を得たこと、また文部省科学研究費による研究の一部であることを付記する。

注

- 1) 拙稿「『日本番匠記系本』の類型」日本建築学会論文報告集第335号 昭和59年1月。
- 2) 『匠明』『堂記集』所載の人体表相図は、裏面書で平内政治(享保元年没)もしくは次の信直(享保12年没)以降の筆と推定されている(伊藤要太郎『匠明五巻考』鹿島出版会 昭和46年)、『径山寺記』『無隠図』については、横山秀哉『禅宗建築の研究』私家版 昭和33年に詳しい。

SYNOPSIS

UDC : 72.03 : 389.1

LINEAGE OF "NIHON-BANJYO-KI" TYPE OF ARCHITECTURAL REFERENCE BOOKS

by Dr. KATSUHIKO WATANABE, Assoc. Prof. of Nagoya Inst. of Technology and Dr. AKIRA NAITO, Prof. of Nagoya Inst. of Technology, Members of A. I. J.

This paper is one within a series of works in which we intend to clarify the process of the establishment of Japanese architectural reference books in the Edo-period.

We can trace the lineage of "Nihon-Banjyo-ki" type of architectural reference books by examining the differences in composition and expression of each book. As a result of the study, we found that their trace begins at latest, in the fifteenth century and reaches the seventeenth century.